

ドイツ在住トルコ系移民の社会的統合に向けて

——ドイツ社会とトルコ系移民の関係変化——

石川真作

石川と申します。私は、文化人類学の立場からトルコ系移民の現地調査をやっております。そういった立場から、主としてトルコ系移民の側から、ドイツの移民政策の歴史なども交えながら話させていただきます。今、梶村先生が最後に話してくださいましたこととつながるのですけれども。

まず、最初に、少しニュース映像を見ていただこうと思います。

(ニュース映像)

「サッカーヨーロッパ選手権の予選のドイツ対トルコの試合まであと2日です。

トルコ人ファンの熱狂ぶりを見ると、ドイツ代表にとってホームゲームになるのかわかりませんね。一種のアウェイゲームになりそうです。

会場のベルリンの人口構成がきっとスタジアムの観客に反映されるでしょう。

この試合では、トルコ系の選手が双方のチームに登場します。ドイツのミッドフィールダーのエジル選手が両親の国であるトルコとの試合に起用されることになっています。

エジル選手が2人、その胸には、ドイツとトルコの2つの心臓が脈打っています。

自分が育った国の代表として自分の家族の国との試合に臨みます。心が揺さぶられる90分になります。

エジル選手です。

『もちろん特別な試合です。友人を相手に戦いますから、特にやる気が高まります。いい試合になると思います。』

両チームとも平和的なサッカーのお祭りであるよう求めています。

トルコのサポーター3万人が会場のベルリンのオリンピックスタジアムに来る予定です。

首都でのホームゲームですが、ドイツ代表にとってアウェイゲームになるかもしれません。

ドイツ代表主将ラーム選手です。

『どんな雰囲気であってもピッチに入れるのは、自分たちにとってすばらしいことです。』ドイツ代表にとっては、2012年開催のヨーロッパ選手権に向けて最も難しい試験でもあります。』

これは2010年のニュースの映像なのですが、このメスト・エジルという選手、サッカー好きな方は多分ご存じだと思いますけど、ヨーロッパでも最高レベルの選手の一人で、ドイツ代表の中心選手なのですが、トルコ系なのです。トルコ系なのですけれども、ドイツのナショナルチームでプレーしている選手で、トルコ代表とドイツ代表の試合をベルリンでやると、恐らく客席はトルコ人ばかりになるだろうという、そういうちょっと皮肉った内容を含めたニュースに

なります。

この辺の背景も含めて考えたいのですが、今、紹介したメスト・エジル選手は、2014年のサッカーワールドカップでも非常に活躍をしました。今申し上げたとおり、ドイツ人だけトルコ系という、そういう人になるのですが、ちょっと思い出していただきたいのですが、2002年のワールドカップ日韓大会のときは、トルコと言えば決勝リーグの初戦で日本が負けてしまったという、非常に恨み深い相手になるわけですが、このトルコ代表のやはりトップ下の司令塔の位置でプレーしていたのがユルドゥライ・バシュトゥルクという選手でした。彼は、生まれも育ちもドイツです。あと、日本で「王子」とか「かわいい」などといって人気が出てしまったイルハン・マンスズという、その後ヴィッセル神戸に来て、ほとんどプレーしないで帰った選手ですが、彼も実はドイツ生まれ、ドイツ育ちなのです。

そのときの日本の報道でも、彼らは、ピッチ上では、トルコ語じゃなくて、ドイツ語でしゃべっているというようなことが、おもしろい話として紹介されたりしていましたけれども。メスト・エジルとこのバシュトゥルクやマンスズと何が違うのか、これは、やはり世代の違いなのです。先程梶村先生にご紹介いただいた、国籍法が変わる前に育ったか後に育ったか、これが大きな違いになります。こういったところから、かつて非移民国家であったドイツが移民国家となったというところの変化が見てとれるかと思います。その辺のことは少し後で順々に考えていきます。

まず、トルコ人がドイツに移住してきた背景から簡単にご紹介します。現在、ドイツの人口はおよそ8,000万なのですが、その中で1,634万の「移民の背景を持つ人々」という統計のカテゴリーがあります。これは、要するに移民なのですが、移民とその子孫たちをひくくめるめた数というのが1,600万、つまり20%という数になっています。一般的にドイツの場合、いや、ドイツだけでなくヨーロッパの主要国では、大体移民人口が1割とずっと言われてきたのですが、もう世代交代していますので、新しい世代まで含めて、もちろんドイツ国籍の人たちまで含めて、移民という形でとっていくと、ドイツの場合は2割にいきます。フランスなども、大体同じです。それぐらい完全に移民社会になりつつあります。その中で、トルコ共和国の出身者が約300万人という形になっていますので、これは、1国の出身者としてはヨーロッパでも最も大きなパーセンテージを占める事例ということになります。

今は難民問題が大きくなっているのですが、一般的に、ずっとドイツにおいて移民問題ということが言われていたのですが、それは事実上トルコ人問題であったということが言えると思います。

その歴史をざっと年表ふうに見ていきます。まず、1961年ドイツとトルコの間で雇用に関する2国間協定というのが結ばれます。これは、トルコだけではなく、その前にイタリア、スペインといったところと結ばれていて、それから、割と人口大きいところで言うと、この後にユーゴスラビアと結ぶなどしております。そういった非常に多様な移民がドイツにはいるのです。その中で圧倒的に数が多いのがトルコ系なので、トルコ系が非常に目立つということになるのですが、単に人数が多いから目立つだけではないです。

最初のトルコ系の第一世代が来たのは、もう1960年代の話です。この時代は、移民労働者として、3年間働いて、帰って、また新しい人がやってきて、3年間働いてという、ローテーショ

ン政策というモデルが、ヨーロッパ全体で共有されてきたのですけれども、そういったやり方でトルコ系の労働者をたくさん入れました。これは、今、日本が同じようなことをやっているという部分も指摘できるのですが。

しかし、現状を見ればおわかりのとおり、そのローテーション政策で、彼らが帰って循環したのかということ、そんなことにはならない。現実には、1970年代にこの協定が停止した後に、事実上彼らは定住化するのです。定住化した後に、今度は家族を呼び寄せたり、結婚したりし子供が生まれたりして、結局事実上の人数はふえていくという、そういうようなことになっていかざるを得ないわけです。この時代にドイツでは、「私たちは労働力を呼んだつもりだったが、来たのは人間だった」という言葉が使われて、これは世界中に有名になります。

先ほども出てきましたが、もう既に1978年には、統合という概念がドイツでも使われます。現在、ドイツだけではなくて、ヨーロッパ全体において、移民に対してどういうふうに対応するかというときにこの統合という言葉が非常に重要なキーワードになります。

しかし、ドイツの場合は、1980年代から16年間にわたって保守系の政権が続きました。ヘルムート・コールという、東西ドイツを統合に導いたということで非常に高名な首相がずっと政権を保ちました。この時代の、保守系のキリスト教民主同盟の基本的な考え方として、ドイツは移民国家ではないという、この考え方がずっと堅持されるのです。これによって、非常に長い期間、事実上そこに存在するのだけれども、しかし、やがて帰る人たちであるということで、存在しないかのような形で、トルコ系の人たちが非常に中途半端な状態に置かれた時代が続くのです。そのような状況の中で、後ほど紹介しますが、並行社会という言葉がドイツでは使われるのですが、そういった、一つの社会の中に別の見えない社会が存在するというような形で、トルコ系の人たちが独自の社会をつくっているといわれるような状況につながっていくわけです。

ただ、そういう中でも、1990年代に入りますと、90年の外国人法の改定によって、帰化要件が緩和されます。ここもちょっと日本と比較するとおもしろいところです。先ほどご紹介いただいたとおり、ドイツは、この時代は血統主義の国籍法だったのです。その中では、もし、住んでいるトルコ系の人たちが、あるいはトルコ人だけではなく、外国人がドイツ国籍をとろうと思ったら、帰化手続きをします。この帰化手続きが、ドイツの場合、基本的には、いわゆる裁量帰化という考え方で、つまり、外国人が帰化できるかどうかというのは、それは国が裁量を持っているという考え方だったのです。この場合、いわば、ドイツ人にしてあげるかどうかはドイツが決めるという考え方でした。日本は現在も同じ考え方が維持されています。

この1990年の外国人法の改定でひとつ変わったのは、ここに権利帰化の概念が入るのです。つまり、一定の条件を満たせば国籍をとることができるという形で、権利としての帰化という考え方です。これによって、移民国ではないという状態を維持しながら、しかし、実質的に移民化した人たちについては、社会に取り込んでいくと、そういった方向に変わります。

そして、先ほどご案内がありました2000年施行の出生主義を導入した国籍法の改定によって、ドイツナショナリズムの重要な要件であった血統主義の考え方が実質的に見直しになりました。

ここが分かれ目になって、前世代のバシュトゥルク選手と、後の世代のエジル選手の違いが生まれます。結局彼らの何が変わるかということ、サッカーどうこうだけではなくて、要するに、

彼らがどう育ってきたかの問題なのです。バシュトゥルクやマンズはトルコ人として育っているのです。ですから、もちろんドイツ代表の15歳以下代表とか、そういう年齢別代表には呼ばれたことがないのです。実は、当時のフォクツ監督は、成人したバシュトゥルクを招聘したそうです。国籍を変えて来てくれと言ったそうですが、拒否されたそうです。それはそうですよね。ずっとトルコ人としてやってきて、一度もドイツ代表には呼ばれたことがなかったのに、突然ドイツ人としてやってくれと言われても、それは無理です。しかし、エジル選手の場合は、子供のときからずっとドイツ代表に呼ばれてきていますから、自然にずっとドイツ人としての振る舞いになるということになってくるのです。このあたりで、非常に大きな違いが出てくるわけです。

つまり、そこから2005年1月施行の移民法の制定があり、それから移民の統合に議論の焦点が移っていくことによって、外国人、移民の人たちとドイツの社会との関係性が、大きく変わっていくのです。自分たちがドイツの社会で生きていくという、ある種の確信というか、そういったものが持てるようになってくるということが大きな差として出てくるのであろうと。

ここまで来るまでに40年もかかっているわけなのですが、ここでドイツが移民国家になるという決心をするのに大きく作用したのは、事実上2割にも及ぶ移民人口があるということもそうですが、やはり大きかったのは、少子高齢化なのです。労働力人口の減少ということが、非常に大きくて、1990年代によく言われたのは、そのままいくと2050年には、トルコ人とドイツ人の数が逆転するぞというような、そういう冗談めいたようなことが時々言われたりして、やはり人口減少という危機に直面したときに、こういった変化が起きてくる部分はあります。

それと同時に、EUの共通移民政策の中で移民統合ということが非常に強く求められるといった外からの影響もありますし、いろいろな要因があって、人権に基づいたシティズンシップの構築という、90年代の世界的な議論の影響、そして、それをある程度現実化しようという意思とか、いろいろな要因がかかわってくると思います。

かつて、しかし、ドイツがまだ移民国家となる前の時代には、選挙のたびに出てくる言葉として、「外国人問題」という言葉がありました。この「外国人問題」という言葉が非常に特徴的なのです。外国人問題という言葉の背景にあるのは、ドイツ人と外国人という二分法の捉え方なのです。これは、日本もそうです。日本人/外国人ですよ、基本的に二分法で捉えるというのが割と一般的です。

ここには、やはり血統主義が非常にかかわっていて、つまり、もちろん括弧つきですけども、単一民族国家的意識といったものが背景にあるわけです。そういった考え方の中では、ドイツ人と外国人をどう分けて考えるのかというときに、これはもちろん国籍によって分けるというのが前提ではあるわけですが、日常的な言説の中では、血統や系譜の観念というのが非常に強く影響するのです。これは日本も同じだと思います。

それにさらに宗教であるとか、出身地域であるとかというものが加味されて、ドイツ人と外国人の二分法の言説が一般的に使われます。そういう言葉を使っているときに距離感としてあらわれてくるのが、自分がドイツ人であるという自己認識を置いたときに、割と近い「外国人」は誰かという、ヨーロッパのキリスト教徒である、その次に来るのがユダヤ教徒である、そこから、ずっと遠くにいるのがムスリム、イスラーム教徒であるという、そういった意識的な

距離感があるのだと、そういう研究があります。これは、多分ある程度は当たっているのだろうなという気はします。そこから見えてくるのは、「外国人」にも段階があって、そこではいわゆる人種的な外見なども含めて、文化的な距離感といったものが非常に作用してくるのだと。

ですから、ドイツ人／外国人というときに、必ずしもドイツ国籍の人とドイツ国籍じゃない人という分け方では、どうも完全には理解できないぞという話になるのです。

そういった言葉の使われ方があって、「外国人問題」という問題設定になってきたときに、では、その「外国人問題」とは実質的に誰のことを言うのだとなると、恐らくはガストアルバイター、つまりかつての外国人労働者として来た人たちとその子孫の人たちが、恐らくその実質的な対象であると。そこでやはりまず思い浮かぶのはトルコ人であって、ほかにイタリア人やスペイン人の人たちなどもいるのですが、こういった人たちは後ろに隠れて、潜在的には意識されているような状況であると。あとは難民ですね。そういった人たちがすなわち「外国人問題」の対象となっていたのだらうと思われまます。

一方で、例えばEU内のある種同等の国家であるイギリス人であるとかフランス人とか、あるいは日本人の企業駐在員の人たち、そういった人たちは、この場合アウスレンダー（外国人）には含まれないという感覚になってくる。こういう使い方をする場合、これは語感として、日本語の「外人」に似ているところがあるのだらうと思うのです。

日本とドイツに共通しているところだと思うのですが、この場合、一つ特徴的なのは、こういった何とか問題ということをするときに、人種問題、移民問題、あるいはエスニシティとか、こういう言葉は使われないのです。使われるのは、「外国人」問題なのです。つまり、ドイツ人と外国人、この2つのカテゴリーしかどうも余り意識されていない、つまり、同じ国の人間なのだけれども、例えば出身が違うとか、あるいは人種の特徴が違うと、人種の特徴という概念の存在自体が問題なのですけど、そういうことが違うというようなことは、多分想定されていなかったのです。

ですから、そこから移民国が変わってくるというときに、非常に大きな変化があらわれざるを得ないのですが、では、今の時点で、そこがすごく大きく変わっているかということ、ちょっとわからないなという気がしてしまうところがあります。

そういう時代が非常に長く続いたのですけれども、現在においては、もちろん当然移民の存在というのは、もう存在するのだということは前提になっています。そこからさらに、先ほどお話しいただいたように、難民の人たちがやってきて、この人たちを助けるんだという、まさに歓迎する文化といったものが作用するという状況も起こってきているのですけれども、2000年代以降、特に移民法の制定が大きな一つのきっかけになって、移民の社会的統合ということが、ドイツにおいては重要なテーマになってきているわけです。

この統合という言葉がいろいろな意味にとられるのですけれども、では、実際統合は何を指しているのか、2007年以降統合の一つの指標になっているドイツの国家統合計画の内容を見ていくと、統合のひとつの意味合いが少し見える気がします。

統合ということの一番中心的な施策として置かれているのが、ドイツ語習得のための統合コースです。これは、ドイツにやってきた移民ないしは難民の人たちに必ずドイツ語の授業を課すと同時に、それと、ドイツ社会のいろいろな考え方などに関しても勉強してもらおうという、移

民のための勉強のコースというのをつくっているわけです。これは、ドイツだけではなくて、ヨーロッパでは全体としてそうしたことをやっています。中身は少しずつ違いますけど。

さらに、統合コースだけではなくて、子供や青年の学習支援であるとか、それから、もう既にある移民の子供たち、若者たちのための職業教育であるとか、あるいは大学進学機会の拡大であるとか、こういったことが施策として中心に置かれているのです。いろいろ書いてありますけども、こういったことが一番中心です。つまりは、ちゃんと教育しましょうという話です。ちゃんと教育することによって何がもたらされるかという、自立した社会人として、自立した存在としてドイツで生きていけるだけのスキルを身につけるということ、基本的な社会的なさまざまなことを身につけるということが重要であると、そういう話になってくるわけです。ということは、裏を返すと、それまでのいわゆる失われた40年間において、そういうことがちゃんとできていなかったということが大きな問題になってくるわけです。

こういったことを示す言葉として、「並行社会」という言葉が用いられます。これは、統合されざる移民によって、全体社会と交わることのない独自の社会が形成されているという状況を批判的に表現した概念です。かつてこの並行社会という言葉が頻繁に使われたときには、同時に「主導文化」という言葉もよく用いられました。

この言葉自体がいろいろな捉えられ方があって、ご存じの方は多いかと思いますが、この議論が表に出たときには同化主義だという、批判を浴びました。例えばご覧になった方もいるかもしれないですけど、「おじいちゃんの里帰り」というドイツ映画があって、トルコ系の家族のことを扱った映画なのですが、この中で、この主導文化という言葉がちょっと戯画化して使われています。そこでどういうふうに使われているかという、トルコ系のおじいちゃんが夢で豚を無理やり食わされる夢を見るというような形で描かれているのです。そうやってドイツ人になろう、あるいは、なれというような、そういう形で描かれたりして、そういう同化主義として捉える議論があったのですが、それは誤解で、本当のところは、もっと近代主義への統合によって並行社会を解消しようという考え方なのです。

ちょっとその辺は入り込むとややこしいので、一旦これは横におきますけれども、いずれにしても、トルコ人たちが、あるいは、別の言い方をすればムスリムが、イスラーム教徒がドイツの中で自分たちだけの独自の社会をつくっているというようなイメージがかつてありました。

これは、シュピーゲルという主要な雑誌に載った写真なのですが、こういった写真がそのイメージをかき立てるようなこともありました。上の写真は、いわゆるモスクです。工場地帯の中にこういうアパートの一室を改造したモスクがあります。ただのアパートの一室なのですが、実は中がモスクになっていて、こういうお坊さんがいて、そこにトルコ人たちが夜な夜な集まって、トルコ語でしゃべり、上のパラボラはトルコ語のテレビの衛星に向いているという、だから、中に入ったらここはトルコだというような、こういうイメージがどうもこの言葉と同時に流布されました。このこと自体は事実です。確かにそういうことがあります。

ただ、そういう並行社会というのが、どうしてあらわれるのかということを考えると、ではイスラーム教徒が、あるいはトルコ人が自分たちの文化をかたくなに捨てないからだ、というようなことなのかというと、必ずしもそうではないのではないかと思います。長くなるので、これはお手元のほうをごらんいただきたいのですが、やはり大きいのは、社会経済的な要因が

非常に大きいのです。そこには、先ほど申し上げたような、教育の問題というのが非常にかかわって、かつて70年代、80年代の移民国ではないドイツに移民が存在するという、そういう状態の中で、かなり多くの人たちが学校教育からこぼれ落ちてしまっているのです。特にトルコ系の人たちが。その人たちは第二世代なのですが、現在、大体30代から40代ぐらいの今主力になって社会で働くべき人たちだったりするのです。

こういう人たちが、ドイツは学歴社会で資格社会ですから、どちらも不十分な状態だと、なかなか職が得られないということで、失業率が高いという状況がずっと続いてきている。ここが非常に大きな問題なのです。ですから、文化の問題だけではなくて、複合的な要因による移民の底辺化状況、あるいは貧困の連鎖、といったことを示唆する概念というふうを考えるべきだろうと思います。

このことがドイツ社会に非常に意識されたのが、2000年のPISAショックです。PISAは、OECDレベルで子供の学力検査をやった、日本も参加したものなのですが、その中でドイツの子供たちの学力が非常に低かったと。ドイツは、非常に学力が高いということが国力であるということがずっと考えられてきたわけなのですが、非常に低くなってしまった。これが、やはり移民の子供たちの学力への助けがなかなかおぼつかないことが一つの要因になっているということが指摘されたりしました。そういったところから、さまざまな変化も起きてきます。

多分ドイツ人が、並行社会という言葉のイメージとして恐らく思い描くのが、先ほど写真でご紹介した急づくりのモスクみたいなものだと思うのですが、イスラーム教徒であるトルコ系の人たちにとって、やはりモスクであるとかそういった宗教関係の施設というのは非常に重要なものであり、と同時にドイツにはそれまで存在しなかったものなのです。ですから、彼らは、もう既に1970年代の初めから自分たちでそういうものを用意してきたわけです。ドイツもトルコもどちらも社団法人なり、団体をつくって、さまざまな活動をするという同じような文化があって、ですから、トルコ系の人たちも非常に早い段階から自分たちで団体をつくって、その団体にモスクを運営するというのをやってきました。

これは、実は、ドイツでは長く定着していることです。さらに言えば、全部の紹介はここでは避けましても、実はそうした団体が、トルコのいろいろな政党であったり政治的な勢力であったりのひもつきになって、上部団体ができ、その上部団体が幾つものモスクを束ねるといった、本当に「並行社会」的な、ドイツの中でありながらトルコのさまざまなことがそのまま影響しているというような状況も実際にはあったりもします。

と同時に、しかし、個々の移民たちにとっては、このイスラーム団体というのは、自分たちのエスニシティを発露する場でもあり、あるいはコミュニティを形成する基盤でもあるのです。この場所で、例えば何かあったときに、お互いに助け合ったり、それから、昔だったら仕事を紹介したり、あるいはものを売ったり、買ったりとかそういうこともやっていました。そういう、いわゆるエスニック団体としての性格もあったわけです。ですから、こういう場所で、かつてドイツの中で、余り自分たちのインフラや自分たちのためのサービスが提供されなかった時代に、自分たちで何とかしてきたという歴史もあります。

移民内部での生活を築き上げるための目的と、それと同時に、トルコの政治状況とのかかわりという、この2つの意味がイスラーム団体にはありました。今でもあります。

そういったタイプのイスラーム団体がつくっているモスクのことは、「裏庭モスク」などと呼ばれました。これは私が、Hinterhofmoscheeということばを勝手に訳したのですが、Hinterhofは建物の裏側にある物置みたいな場所のことを言うのですけれども、そういった場所を改造して、自分たちでモスクをつくっているという、こういったイメージがこの名前になっています。

ですから、この写真のように、外から見てもモスクだとはすぐにわからないのだけれども、看板を見れば実はそうだとことがわかるとか、そういったような、あるいはパラボラの向きがこっち（トルコの放送衛星）に向いているから、あれはトルコ人のところだぞみたいな、そういういろいろな要因で、なかなか表には出てこない形でこういった施設がつけられていった歴史があります。

私が調査をしているデュースブルクという、先ほどお話に出てきましたルール工業地帯の町なのですけれども、ここでは、1996年に、この裏庭モスクをめぐる典型的な文化コンフリクトが起きました。アザーン問題といって。アザーンというのは礼拝の呼びかけです。よくイスラーム世界のことが紹介されるときに、まちにコーランが響き渡っている様子なんていうのが紹介されますが、あれのことです。礼拝の時間を呼びかける呼びかけです。

このアザーンを、スピーカーを使ってやりたいということのあるイスラーム団体が市に申請したところ、それは騒音公害だみたいな批判が出まして、その後、話がこじれにこじれて1年ぐらいつつと論争になったことがあるのですが、そういったことがかつては起きました。しかし、これが結果的にイスラームについての表立った議論のきっかけにもなりました。

かつて、非移民国時代のドイツの地域社会とムスリム、トルコ系の人たちとの関係というのは、ちょっとそういうような、いろいろ問題をはらんだ部分もあったのですけれども、そこから少し時間がたってくると状況が変わってきます。

この写真に出ているのは、トルコではなくてドイツのモスクです。これは、先ほど紹介したデュースブルクという町にある、一時期はドイツ最大だったモスクの写真です。ケルンにもっと大きいのができて2位になったのですが、これも先ほどのコンフリクトの後いろいろな議論があって、そこから全然違う形でこういったモスクがつけられたという経緯があるのです。

このモスクは、まず建設の段階で地域の人たち、学校関係者であったり、教会関係者であったり、いろんな人たちと一緒にプロジェクトを組んで、イスラーム団体だけでやるのではなくて、地域の人たちと話し合いながらつくっていきました。

その資金も、もちろん自分たちの寄附が中心なのですが、EUであるとか、ノルトライン・ヴェストファーレン州などから補助金をもらっています。ただし、宗教施設ですから、もちろんその補助金はモスクには使えないのですが、実は、この建物の下が公民館になっています。地域センターになっていて、そちらの部分は補助金を入れてつくりました。ですから、単にムスリムのための施設ではなくて、地域全体の施設として活用する、その上にモスクを乗せているという、そういう形でつくっていきました。これは2008年に竣工したのですけれども、これまでにない形で建設されました。この下の写真なんかは、地元の老人会の人たちに、やはりトルコ人のリタイアした年金生活の人がイスラームについていろいろ説明している、こういうガイドツアーみたいなことをやっていたりします。こういうようなことにも活用されています。

ひとつ映像があるのですが、これは飛ばします。何の映像を見せようとしたかという、

このモスクに、いわゆるネオナチ、極右の団体がデモを仕掛けようとしたときに、地域の人たちがぱっと人間のバリケードをつくって防いじゃったということがあって、全然人数が違つたと、守る側のほうが圧倒的に人数が多くて、ネオナチのグループは退散したと、そういう出来事があったのですけれど、つまり、そういったところを見ても地域の一人、そして地域の資源として認知されているといえると思います。

この「地域の資源として」という部分は、何があるかという、実は、観光資源としてもかなり活用されているのです。デュースブルクという町は、もともと鉄鋼の町といわれていたのですが、鉄鋼業自体が斜陽産業なので、観光にシフトしようとしているのです。その中で、町の真ん中にカジノをつくったりしているのですけど、それから、鉄鋼業の跡、いわゆる近代化遺産と、もう一つは、移民の町という、この3つの柱でやっています。

さらに、もう一つご紹介したいのが、これは、結構過激だと言われてきたイスラーム団体が運営している学生寮なのですけれども、これも、最初は、こういうものをつくったときにイスラーム教育をやるためなんじゃないかといわれて、地域からかなり反対があったのですが、何のためにつくったかという、これは、別にここで教育をするのではなくて、子供たちを住まわせて、ここから学校に行かせるためなのです。何でそういうことをやるのかという、この地域が、やはり先ほど申し上げたような、貧困の連鎖がある場所で、子供たちがいわゆるストリート・チルドレンになってしまい、麻薬の売人になってしまったりするケースが結構あって、そういうところから遠ざけて勉強をできる環境をなるべくつくるんだということで、こういうものをつくっているのです。

これは、トルコでも同じような試みがあったることなのですが、この試みも今ではもうかなり、市で受け入れられています。この子供たちの写真は、私が2009年の断食の時期に行ったときに撮った写真です。断食のときは、日没の後にみんなでご飯を食べるのですけど、そこに、このときは市長が来て挨拶していました。市長や、市の青年局長などが来て挨拶して、いろいろと言って持ち上げていましたけど。そんな感じで地域に定着しています。

それだけではなくて、さまざまな地域プロジェクトで、実は移民出身者が中心になって働いている。市のさまざまな部署に就職していますし、それからあと、さまざまなNPOを彼らがつくって、いろんなプロジェクトをやっているという状況がこのデュースブルクというまちでは見られます。

そういったわけで、結論めいたところに行きたいのですけれども、こういう現実があって、すなわち、彼ら自身も含めて統合に向けていろんな形で進んでいこうというのが今のドイツのトルコ系移民の人たちと社会との関係の中で見えている方向性なのだと思います。

ここに統一20周年式典のことを挙げたのですけど、ちょっとこれも話が長くなるので簡単に触れますが。2010年の統一20周年式典で、当時のヴルフ大統領が「今は、イスラームもドイツに属している」ということを言いました。このことに関して、後々に批判が出まして、特に保守系のCDU、キリスト教民主同盟の議員などからかなり批判が出ました。典型的な批判を1つだけ挙げますと、「イスラームもドイツの一部なのであれば、シャリーアも一部にするのか」と。シャリーアというのは、イスラーム法です。平たく言ってイスラーム教徒が守るべき戒律のことですけれども。これがなぜそういう話になるかという、2005年にイギリスのロンドンで同

時爆破テロがありましたね。あれがヨーロッパで広く認知された最初のホームグロウン・テロリストによるテロで、要するにイギリスで育ったパキスタン系の若者たちがテロをやった、彼らはイギリス人であるのになぜそういうことをするのだと。それは、イギリスの法律を守る気がないからだ、なぜかといえば、イスラーム法のほうが大事だと思っているからだ、というような議論が、ヨーロッパではこの後ずっとくすぶっているのです。そういうことを絡めて、そのような批判が出たりしました。

こういう議論というのは、ある種、それこそ先ほど高橋先生がおっしゃられたように、ムスリム嫌いはムスリムに触れたことがない人たちであるという、そういうこととまさにリンクしていて、つまり、イスラームというものを、単にイメージ、あるいは文明論のレベルで論じているといえます。

ドイツに住んでいるムスリムたちが一体どういう人たちで、何をしているのかということではないレベルで論じられているところがあって、実際にドイツで生活している移民の生活がどうなのか、そんなにいかにもムスリムであることに凝り固まっているのか、ドイツ社会と接点がないのかといったら、そんなことは全然ないわけです。それで生きていけるわけないですから。彼らは、ムスリムであるのと同時に、例えばドイツの公務員であり、あるいは会社員であり、あるいはケバブ屋のおやじであり、そういうふうにして生活しているわけです。

実際には移民の生活というものは、もうドイツの社会空間に埋め込まれているわけです。そして、ドイツ自体も移民法の制定によって社会の仕組みも、国家の仕組みも移民国家に変わろうとしている、あるいは、変わってきた。そういう意味では、国家も社会の仕組みもそして移民の生活も、もうこれはドイツという一つの社会空間の中にながら入っている、このことは間違いないわけです。

そもそも文化というものが、ある同じ場所にありながら別の文化というものが存在し得るのかといったら、これはちょっと文化人類学の話になってしまうので、余り深入りは避けまされども、そういうことは不可能なのです。人間の生活が同じ場所にいながら幾つにも分かれているということはあり得ないです。

ですから、そういう意味でドイツ文化とイスラームというのは、すでに不可分の文化的空間にある、つまり、生きている文化、生きられている文化としては不可分であるというふうを考えるべきであろうと。これは、どこへ行っても、どこの移民でも同じことだと思うのです、あるいは外国人でも同じことだと思います。

しかし、どこかでまだ、先ほど申し上げたような文化的ナショナリズムであるとか、血統意識であるとかそういったものも残っていて、そのあたりの不整合が少し見られるかなというところはあります。しかしそれは、徐々に変わっていくのではないかなというふうには思います。そういった意味で、多様性を織り込んだ新しい社会空間の構築に期待したいというふうを考えているところでもあります。

すみません。少し時間が過ぎてしまいましたけど、私の話は以上にさせていただきます。(拍手)